

## 変形性膝関節症そのII 2026.4



膝の痛みの原因の多くは変形性膝関節症が関係しています。(広報げろ先月号参照)。

◎変形性膝関節症の診断は、まず臨床的に問診、視触診などを行います。症状、歩行状況、生活習慣、履物の形状、体重、変形(X脚、O脚)、膝関節屈伸の状態、不安定性、膝周りの圧迫やストレスによる痛みの有無、腫れ、熱感、下肢筋力などを調べます。(三割負担で920円程度)

◎X線検査では骨の変形、位置異常、石灰化などの程度から変形性膝関節症の程度を0(異常なし)から5(末期)の5段階に分類します。膝関節と関係する骨盤や足の形状との関係なども診ます。(3方向の撮影:三割負担で900円程度)

◎エコー(超音波)検査ではX線検査ではわからない変化を見つけます。関節内に水が溜まっているか(増えているか)、滑膜の炎症による血流(血管)の増加、関節外の変化などを調べます。(三割負担で1,050円程度)また、エコーで針先の位置を確認し、確実に関節内の液を吸引したり、目的部位に確実に薬液の注入をおこなうといった正確で安心できる治療が可能です。

◎CT検査では微細な骨折や変形、骨の位置関係などを詳細に、また立体的に判断し、その後の治療に役立てます。(三割負担で4,410円程度)

◎MRI検査は関節内部の半月板、靭帯の損傷、軟骨のすり減り具合、骨の内部変化などX線検査ではわからない(X線では映らない)部分の診断に適しています。(三割負担で5,700円程度)

◎変形性膝関節症は40歳以上の女性に多く、初期には無症状なので、痛みで気づいたころにはかなり進行していて対応が遅れるといった問題があります。変形(軟骨のすり減り)を早期に発見し適切な進行予防策をとることが大切です。金山病院でも上記のような診断方法を駆使して変形の程度を診断し、関節内視鏡や人工関節手術など専門病院と連携して個々の症状に合った治療法を提供、提案しています。

◎どのような治療を選択しても治療の効果を上げるのは筋力です。筋力低下は病状の進行の主な原因であり日常生活の中で正しい姿勢での筋力トレーニングは必須です。金山病院でも変形の程度(症状)に応じて、膝に負担のかからないトレーニング、減量の必要性、履物などの生活習慣についても相談に応じています。